

平成16年

# 「感謝の会」

期日: 平成 16年 4月 13日(火)

場所: ウェスティンナゴヤキャッスル  
~ 天守の間 ~

Appreciation Party 2004



遠山塾主の74回目の誕生日に先駆けて「感謝の会」が盛大に行われた。本年度のテーマは「先生 ありがとう」。会場には第1青経塾から第38青経塾の塾生一同が出席し、終始和やかな雰囲気にも包まれた会となった。

## 結束力がもたらした 感謝のかたち

見入ってしまうほどエンターテイメント性の高いステージで湧き上がった今年の「感謝の会」。プログラムに基づく計算されたものだけではなく、内側から滲み出る存在があった。このわずか2時間にかけて情熱の根底に流れるもの、突き動かされる力はなんだったのだろうか。

塾主の「命」に感謝したい、楽しんでいただきたいから素直な気持ちでこの会を成功させたい、その感謝の意を表すのにどうしたらいいのか…。PJの志すところは始めから固まっているはずなのに、それでも紆余曲折があったという。立場の違い、価値観の違い、関わり方の深さもあれば、思いの温度差ももちろんある。費やせる時間はほぼ半年。時間はどんどん過ぎていく。ベクトルを揃えるために幾度となく叱咤激励を繰り返したという。そして、1ヵ月を切った辺りからようやくそのベクトルが一致してきた。

かつて「ど真ん中まつり」で高知県知事賞を得た24、25、26塾の真髓、「結束力」が再び甦ったといわざるを得ない。気付けば一丸となって一斉に会に挑み、そしてあのステージが生まれていた。相手を知り、相手から自分を知る自己開示のできる先輩方だったからこそ、「楽しんでいただくことが自分たちの喜び」というものを掴めたのではないだろうか。

「先生と共に生きたい。」すなわち、ひとりひとりの塾主への思いがひとつになる瞬間、感動があった。塾生になって「感謝」の意味も分からない一年足らずの私たちですら、熱いものを感じ、読み取っていた。言葉では言い表せないが、その場に居合わせた者同士がにこやかにあり、次々と展開されるステージに心が躍っていたことに尽きる。

## 「命の続く限り、私は青経塾をします」 万感の思いで所信表明される

塾主へプレゼントの目録は全塾生を代表して川本塾頭より贈呈。「我々自身の労が報われるのが、先生へのお返しです」と祝辞を述べられた。

「石の上にも30年。“やりきる”というのが大切、と感じました。ひとりやふたりではやり切れません。希望を持とう。希望は自分がつくるものです」祝辞を受けて挨拶される塾主は、こんな言葉から切り出された。

そして「命の続く限り、私は青経塾をします」と迷いのない力強い言葉で明言され、この表明を聞くと同時に割れんばかりの拍手喝采に包まれた。

PJにとっては「ありがとう」と言葉をいただけるのであればそれだけで十分だと思っていたという。ところが、塾主から発せられたものは「熱いやる気」だった。「最上級のお褒めをいただいた、と堪えきれないほど嬉しかったです。肩を寄せ合ったみんなの目に涙が潤んでいました」とPJのある先輩に伺った。

全身全霊を傾けて何かに挑む。私生活でも仕事でもそのチャンスにめぐり合う機会というのは極めて少ない。自然に逆らわず望みを信じ、今在ることに意義を見出すこと、支えあい、相手によって育かれたという「人間性」を見出したこの会の意味を、深く心に刻んでいたいと思う。

< 第37塾 小濱敬子 >



遠山語録



アットホームな雰囲気で行われた出し物は、バンド生演奏、寸劇、パフォーマンスなど。大道芸のエンディングはキャスト全員で見事なチームワークを披露。場内は終始感動と笑顔に包まれた。



JOYEUX ANNIVERSAIRE

